

残りの者 シャーアル

石巻祈りの家NEWS LETTER 「シャーアル」(114号)
986-0801 宮城県石巻市水明北3丁目13番28号
TEL /0225-96-1497 Email/ hjm-ja2@yg8.so-net.ne.jp

振替口座 02290-6-126186 口座名称 阿部 一
●代表/阿部 一 ●副代表/菊池せい子



あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。(Ⅱテサロニケ2/17)

信仰:今、教会に求められること

- 7月の猛暑と8月の長雨という月を取り違えたような異常な天気が続きましたが、皆さんにはお変わりなく元気にお過ごしだったでしょうか。
- 東北の地は1ヶ月以上も梅雨のような長雨が続き、日によっては肌寒い日もあり、稲作や野菜の生育に心配の声が聞かれます。この後の残暑が思いやられます。
- 8月に行われた<第18回シンポジウム「地方伝道を考える」>において、大震災被災地で支援活動に携わった岩手と宮城の教会の活動内容の報告があり、活動を通しての教会の社会的責任と教会形成について議論された。
- この支援活動を通して、今まで「敷居が高い」と言われていた教会・支援団体が多くの人から「キリストさん」と親しく呼ばれる大きな働きをした。
- 6年を経て、その働きを顧みるとき、「教派を越えて主にあって1つ」の立場に立て、日頃から地域教会が互いに親しく交わり、協力し合うことの重要性が、その報告の中で共通して提示された課題であった。
- もう一つの大切なこととして、信仰に立った良きわざの再確認であった。宗教改革以降、「聖書(みことば)だけ」が宣教の基盤として強調されて来たために、聖書がもう1つ強調している信仰の実としての「良きわざ」が見失われてきたのではないかと指摘である。
- 外国人からは理解不能と言われる日本人の宗教観(日本教と言われている)が未だに日本を席巻している現在において、今回の大震災支援で「ことば」以上に「良きわざ」を通しての宣教が大事であることが見直された。
- 特に東北地方の各地域においては、未だに住民の心に強く刷り込まれている慣習や因習が、想像を越える大きな力として住民の心を支配している事実が改めて再認識された。
- この力は、理性では説明できない。感情的に「当然なこと」として住民の結束に働いている。これは簡単に破ることができないものではない。
- 「政教分離」はことばだけで、公共事業の起工式や教育にさえ、神道や仏教の儀式が伝統とか慣習とかということばで言い換え堂々で行われている。それを誰も不思議とは思わないし、それに異を唱えるキリスト教にむしろ反発が起こる。
- その宗教的な伝統行事に私たちはどのように関わることが問われる。これらと真っ正面から闘うために勢力を削がれることよりは、むしろキリスト教会は自らの信仰に立脚して、地域住民の益となることや住民が求めていることに今回の震災支援のように「良きわざ」の働きを通して、地域住民に積極的に関わることを求めて行く息の長い宣教活動の大切さを教えられている。
- 残暑厳しい季節、日頃に支援に感謝し、皆さんの健康が守られて過ごされますようにお祈りします。

■ 先月の多くの恵みから

- ① 8月中お休みした諸集会(聖書を読む会/ほっと・Time/楽しい手芸/コーラス花)が9月より再開します。各集会がその働きを通して参加者に良き証しが出来ますように。
- ② 7/23の礼拝に、この群で信仰を培われてクリスチャン・ホームを建て上げた佐々木真奈・類ご夫妻と長女恵麻ちゃんが出席されました。9月に第2子の出産を迎えます。母子ともに神の守りの中で出産できますように。
- ③ 7/28に、「チーム酒田」の姉妹より名産のアンデスメロンを、8/6に津市にあるライトハウスの姉妹より幸水梨送って頂き、会員・来会者に味わって頂きました。

- ④ 8/3に、県南の被災状況と現状を知るために山元町を訪問し、沿岸地区の復興がまだまだであることを知りました。
- ⑤ 8/7に病で戦いにある大平姉を訪問しました。現在週4日ディ・ケアに行かれています。祈りの支えをお願いします。
- ⑥ 8/10に博多ニューライフ教会の南里孝子姉より教会でのランチョンでの多額の売上金を捧げて頂きました。今月も他の兄弟からの継続した献げもので、この群の活動と支援活動を続けられることを感謝しています。
- ⑦ 8/11に、石巻シャロームの会(知的・身体障害者支援)の「障害者で町興し」のシンポジウムに参加でき、現在、活動場所「ベテルの風」が与えられて活動を始めています。
- ⑧ 8/13に、先にICCで1年間支援活動の奉仕されたJade Lus姉が訪問下さり、主にある楽しい交わりを許されました。
- ⑨ 8/18に、七尾市に嫁がれた昌河和恵姉がお父さんと2人の子供と訪問下さり、働きながら主婦として子ども達を真っ直ぐに育てられていることを知り、感謝しました。
- ⑩ 8/21-22に仙台バプテスト神学校で開催された<第18回シンポジウム「地方伝道を考える」>に発題者の一人として参加させて頂き、良き学びをさせて頂きました。
- ⑪ 8/23に石巻オアシス教会で行われた大阪のカリス教会牧師村上師と気仙沼の風間師を迎えての夕拝に参加させて頂き沢山の恵みをいただきました。
- ⑫ Dean師ご夫妻は10/18まで報告と教会訪問のために渡米中です。働きが祝されますように。

■ 今月、次の課題を祈っていただければ幸いです。

- ① 病との戦い自宅で、療養中の大平姉のために祈り支えて下さい。
- ② 長野県佐久市で療養中の濱 道子牧師夫人の回復のために。
- ③ 求道者が起こされるように。市内の各教会の働きが祝されるように。市民の救霊のために。

群の定期集会

・礼拝(毎週日曜日)	10:00-11:30
・祈り会(毎週水曜日)	10:00-11:30
・聖書を読む会(第1火曜日)	10:30-12:00
・ほっと・Time(第3火曜日)	10:30-12:00
・コーラス「花」(第2,4木曜日)	13:30-15:00
・楽しい手芸(第2,4月曜日)	10:00-12:00
・学習支援(地域の子どもの要望に応じて)	

信仰を詠う

9月 母 と は

逝きし娘のこころを汲めぬ母なりと
悔いいる姉妹と立ちつくし哭く
苦しみをおろすは主と知りつつも
私も同じと母の哀しみ
動かねばならぬ現実向かう姉妹
食べて力をと惣菜そっと



阿部 八重子

キリスト者の友人が
娘さんを亡くされました。なんのお役にもた
てない者ですが軛を負
われる主に感謝して共
に祈り合っています。

7月末から8月末までに来訪された先生・兄弟および「祈りの家」の教会活動の様子



8/21-22 仙台バプテスト神学校 (SBS)で開催された「第18回シンポジウム『地方伝道を考える』—東日本大震災と教会—社会的責任と教会設立・形成へ」での発題・質疑/参加者の記念撮影



7/23 石巻オアシス教会で開かれた大阪のカリス教会牧師村上愛信牧師と気仙沼ホープセンター風間D.哲也師による礼拝

8/18 七尾市の畠河和恵姉がお父さんと子ども達と共に来訪



8/11 石巻シャロームの会のシンポジウム

7月に入りICC建築工事開始

8/4 松浦 賢兄来訪

8/5 柳澤姉を訪問

8/3 濱 民雄師来訪

アドナイ・イルエ

「アドナイ・イルエ」＝主の山に備え在りの意

信仰の歩みの中で

母の教え (1)

キリスト教会「石巻祈りの家」代表 阿部 一

洗髪した頭をタオルで乾かしながら、鏡に映っている自分の顔を見るとそこに母の顔を見ているような気がする。老いた白髪の母の顔とそっくりなのだ。また、今朝も腕の付け根に錐で刺されるような耐え難い痛みが走った。この痛みは、忘れたところに、からだを移動し、指や腕、足の付け根などに突然襲ってくる。そんな時に「俺は間違いなくマサ(母の名)の子だ」と再確認して、一言もその痛みを口にすることなくその所にピップエレキバンを貼っていた母を思い出す。

1915年に、母は山形県の現村山市となっている月山に連なり明治以降は衰退したが江戸時代まで出羽三山と唱えられて、山岳信仰の修験道の中心であった葉山麓の岩野と呼ばれる小さな田舎に生を受けた。曾祖父の時代にはいさばや(魚屋)をやっていたらしいが没落し、6人弟妹の長女として、村の尋常小学校に弟を背負いながら廊下で授業を聞いていた。5年生の歳となるともう奉公に出され、映画「おしん」と同じ生活をせざるを得なかった。

どのような経緯で米沢の病院の賄いとして勤めるようになったかを聞くことは出来なかったが、そこで同姓の父と結婚し、3人の母親となった。

時は、太平洋戦争に突き進んで行く時代である。機械工として横浜に徴用され、1944年10月に赤紙1枚で中国海拉爾に配属され(兵籍簿はここまで)た。その時母は28歳で3人の子供を残されたが、間もなく私の姉を病死で失っている。そして翌年の1945年に敗戦になった(8月15日)。しかし、その1ヶ月後の9月12日に戦死したと石ころがころころ動き回る骨箱の形で、父は名誉の戦士となって帰ってきた。長女と夫を失った母は、2人の子供を残された若き戦争未亡人となった。

戦後の食うのもままならない中、母は早朝から夜遅くまで働いたが、幼い子供2人を養うことが出来ず、私は小学1年生と2年生の間、蕎麦と陸稲しか育たず、炭焼きで生計を立てていた母の実家に預けられることになった。その母の実家に戦争から帰った長男が嫁を貰うことになり、私は母の元に返された。極貧の中であったが母は、自分の食べるものを私達に分け与え、着た切



り雀であった私たちに恥ずかしい思いをさせたくないといつも洗濯してきれいにしてくれていた。

今も忘れられないことが幾つかある。母親から怒られたという記憶が無いが、何か道に外れたことをするといつも母は「お天道様が見ているよ」と言った。この言葉は、幼かった私の心に、目に見えないが私たちの心さえも見通す方がいるという畏れの心を植え付けた。

当時、母の1ヶ月の収入では家族が生きていくためには不足だったから、お店から「通い帳」で必要な生活物資を購入していた。月末には精算であるが、到底全ては払えない。しかし母は他の直ぐに支払わなければならないものを後にして、請求書類の現金を耳を揃えて持参し支払って、事情を話してその一部を新たに貸して貰う生活をしていた。この無言の教育で、私も就職して給与を手にするようになってから、現金で支払えないものはよほどのものでない限り月賦で買わないことを心掛けた。

米沢織りの工場で働いていた母は、停電日しか休めなかった。中学時代でも、授業参観の日には出席できなかった母は、何とその停電日に学校に来て、私の机の脇に座って午前中一杯も授業を受けていた。「この母だけには私のことで迷惑をかけられない」という強い思いを覚悟し決意をした。

校長と担任の温かい配慮で、高等学校は田舎の医院に住み込んで通学させて貰った。大学も親からの仕送りを望めず、授業料免除と奨学金を貰ってのギリギリの生活であったから、時計もバンドも革靴も靴もなしで過ごした。そんな中でも、母は貧しい生活でありながら、季節の変わり目に下着などを送ってくれた。その包みには必ず私の好物の「伝六豆」1袋と、鉛筆をなめなめ書いたであろうカタカナ、ひらがな、

当て字の漢字が混ざった短い手紙が入っていた。それは母の私に対する精一杯の愛の表現であった。その夜に古い学生寮の布団の中で溢れ出る涙で霞む母の手紙を何回も何回も読んだ。

多くの方々の援助と支援によって大学を卒業し、酒田の高校に赴任した。先輩牧師の大変な努力で信仰を共にする養女であった妻の家に養子となって結婚した。この時も親類中が大反対であったが、母は「お前が決めたのであれば」と一言も言わなかった。結婚と同時に一緒に住むことを提案したが、勤務先の工場主から跡継ぎに全部任せられるようになるまでもう少し残って欲しいという要望で仕事を続けた。3人目の長女が生まれた時に漸く私たちと同居するようになった。宮城に移ってからは、養父母が前の家にいるという母にとっては余計な心配りをしなければならなかったが、妻と自分の本当の娘のような関係を築き上げ、母の人間としての賢さに改めて教えられた。(つづく)